（様式６）

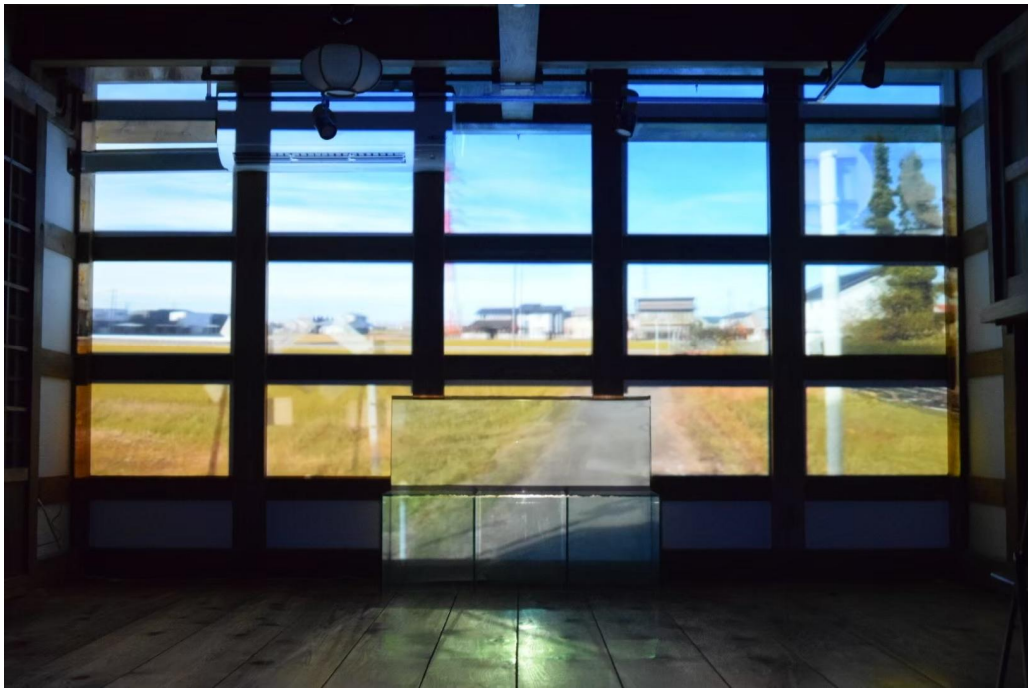
活動実績報告書

団体名	カリフリアム
事業タイトル	つなぐ間
事業の内容	令和 7 年 12 月 6 日から 11 日の会期で行われた本グループ展のタイトルは「つなぐ間」とし、施設の各部屋の名称（一の間、二の間等）へのオマージュとして命名した。制作の共通テーマには「つながり」を掲げ、金沢学院大学芸術学部芸術学科の学生 5 名によるインスタレーション作品の展示を行った。 準備期間は同年 7 月の始動から約 5 ヶ月間に及んだ。7 月から 9 月にかけて会場の下見および運営計画の策定を行い、各展示場所の空間特性に合わせたコンセプトの構築を進めた。10 月以降、作家による本格的な制作を開始し、同時に展示環境の整備に着手した。展示に使用する備品類は主に大学から搬入したが、空間構成に合わせて作家自らが専用の台座を新規制作するなど、各作品の特性に最適化した設営を行った。運営メンバーのうち展示計画担当者は、物品の選定、買い出し、および来場者の順路計画といった設営全般の指揮を執った。また、広報担当者は展示紹介映像の制作やポスターの掲示依頼を担い、代表者が後援名義の申請事務および広報全般のディレクションを統括した。 具体的な展示内容は、以下の 5 つの異なる視点からの「つながり」を主題としたインスタレーションで構成した。 第一に、自己を人や時間の「中継地点」と捉え、駅や列車をモチーフに対人関係の推移や邂逅を表現した展示である。第二に、自身の経験に基づき、つながりを拒む心理をサボテンの棘に投影した、造形物と音声詩による空間構成である。第三に、次世代への夢の継承に伴う自己の変容を、産卵のために川を遡上する鮭と人体を組み合わせた彫刻作品によって提示した。第四に、和室空間の特性を活かし、家族の生活の断片や記憶を再構成することで、日常的な愛着や信頼関係に焦点を当てた展示である。第五に、和室の伝統的意匠である掛け軸や違い棚に、現代的なグラフィックデザインを装飾として施し、伝統と現代の視覚的対比を通じた空間表現である。 会期中の会場運営においては、最低 2 名から 3 名以上のスタッフが常時受付に常駐し、来場者の案内および会場管理を行った。また、電源を使用する作品については、開場・閉場時における操作手順を記した管理マニュアルを個別に作成・共有し、安全な機器運用を徹底した。作家が在廊する時間帯には、作品解説を行うギャラリートークを随時実施し、来場者への直接的な説明および質疑応答を行う活動機会を設けた。

事業の成果	展示構成については、町家および土蔵という会場の特性を考慮し、それぞれの空間に合わせた作品配置を行った。和室においては「家族のつながり」をテーマに、ちゃぶ台や寝具等の什器を用いた展示を行い、土蔵においては「記録」のコンセプトに基づき、空間の特性を反映させた作品を配置した。来場者からは、場所と作品の調和を評価する意見が得られた。 告知については、ポスター掲示や SNS 動画の投稿、地元新聞での取材等を通じて実施した。会期中の来場者数は121名であり、目標としていた 70 名を上回る結果となった。来場者にはメディアを通じて初めて本施設を知った市民も含まれており、施設の認知向上において一定の効果が得られた。また、所属大学内においても本施設の利用が周知され、今後の活用に向けた関心が高まるなどの波及効果が見られた。 本事業への参加は、学生作家にとって実務的な経験を得る機会となった。展示場所の下見に基づく作品のブラッシュアップから、実際の会場設営、会期中の管理運営に至るまで、学外での展示に向けた一連のプロセスを遂行したことは、今後の制作活動における経験蓄積に寄与した。特に、ギャラリートークを通じて来場者から直接意見を得たことは、自身の表現を客観的に捉え直す機会となった。 運営上の課題としては、不定期開催となったギャラリートークの告知不足や、什器配置に伴う会場内の動線確保の不備、およびリサーチ不足による SNS 広告の未実施が挙げられる。総括として、本事業は施設側における新規利用者の獲得と、学生側における実践的な制作・発表経験の蓄積という両面において、実効性のある取り組みとなった。

“家族のつながり”をテーマに温かい家庭を和室で再現した作品

「あなたに注ぐ光」



土蔵内で“記録”をテーマに蔵の本来の機能と作品の内容を合致させた「記録の製造方法」

その他 作品写真

「mon ange」

「音声詩と僕の部屋のインスタレーション」

「遡上」

※ 成果品、資料（チラシなど）、活動写真などを添付してください。